

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

令和3年 7月 16日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	栗山侑子

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
日本モンキーセンター
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
動物園科学基礎論
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
令和3年7月3日 ~ 令和3年7月5日 (3日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
JMC キュレーター、新宅氏、赤見氏、高野氏、綿貫氏、岡部獣医師
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
動物園・博物館の役割、博物館におけるキュレーターの仕事を学ぶことを目的として、動物園としては日本で唯一の登録博物館である JMC (日本モンキーセンター) において3日間の実習を行った。
スケジュール 7/3(土): レクチャー(霊長類学・JMCの歴史) 動物園教育・来園者観察 7/4(日): 飼育実習(ワオキツネザルの個体識別) 標本実習(リスザル骨格標本作成見学、貯蔵物見学、骨の仕分け) 7/5(月): 獣医学見学(パタスモンキーの抜糸) 動物園展示
動物園教育では来園者観察を行い、来園者の会話から人々がどのようなところに注目して動物を見ているかを調査した。私が観察したのはヤクザルの展示の前であったが、ここでの会話は「ヤクザルの動きを見たまま口に出す」ものが多くみられた。普段見ることはない動物であるため、その一挙手一投足が気になるのであろう。そのため、展示方法としては、行動展示のような動物本来の動きを見せることができるものが好まれるのかもしれない。エンリッチメントは飼育動物のより良い生育環境であるだけでなく、来園者にとっても生き生きとした動物の行動が観察でき、またエンリッチメントによっては(特に食事など)、生態を観察できるとも良い学習の場になると思われる。
3日目の高野氏のレクチャーとも共通しているが、JMCは小中学校等の校外学習の場としてよく利用されている。その際の講習では、相手の年齢に合わせて内容だけでなく、説明の際の言葉選びも工夫されていることが分かった。また、幼い子に動物を観察してもらう際、事前に動物の特徴や注目点を伝えるのではなく、お昼の時間休憩時間など、その日の予定を伝えるほうが集中して動物を観察することができるという話は興味深かった。
飼育実習ではワオキツネザルの餌やりの様子を見学させていただき、その後個体識別を行った。餌やりは、ただご飯を食べさせるだけでなく、個体の様子や群れの中でいじめがないか、体調が悪い個体はいないかを確認する重要な時間であることが分かった。個体識別では、最初は全く見分けがつかなかったが、最終的には7匹すべてのワオキツネザルを見分けることができるようになった。目の色や顔、傷、尻尾といった外見の特徴だけでなく、しぐさや他個体との関係にも各個体の個性は表れており、観察していると非常に面白かった。ワオキツネザルはワオランドと呼ばれる広場のようところで直で見ることができるように展示されている。檻に入って展示されている動物は決まった視点からしか観察することができなかつたり、柵が視界を遮ってしまつたりするが、このワオランドではワオキツネザルの行動を360°見ることができるというのは大きな魅力であった。しかし、ワオキツネザルの可愛らしい見た目も相まって、触ろうとしてしまう人や距離を詰めてしまう来園者が散見された。魅力的な展示方法により、動物へのストレスの懸念される場合、両者のバランスをとるのは難しい。
標本実習では解剖されたリスザルから骨と皮を切り分け、骨格標本を作製する過程を見学した。動

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

物園では年齢や健康状態といった個体のデータが残されており、詳細なデータを持つ標本は研究において大変貴重であるというお話を伺った。今現在一般的な動物園では死亡個体を標本や剥製にすることはあまりされていないが、今後動物園でも標本作成が進めばいいと思う。これは各動物園単位で実現させることは難しいため、このような制度化が求められるのではないだろうか。また、貯蔵庫も見学させて頂いた。貯蔵庫には多数の骨格標本、毛皮標本、剥製、内臓のホルマリン漬けがあるほか、サルに関するものなら何でもそろっており、民芸品や掛け軸といった美術品も保存されていた。ここに博物館らしさを感じることができたが、美術品まで貯蔵されていることには驚かされた。限られたスペースに天井までずらりと骨格標本などが並んでおり、一朝一夕では到底集めることのできないその量に、これまでの学芸員の方の努力や苦勞、研究への熱意を感じ、感服の至りである。また、骨格標本の仕分けをさせていただき、私は骨に直接接触のも初めてであったので貴重な体験であったとともに、仕分けをさせていただき、あの膨大なコレクションの中に自身がかかわったものが今後長年にわたって貯蔵されることを大変嬉しく思う。

動物園展示では世界の動物園の様々な展示方法を学んだ。分類学的展示や生態的展示など、展示方法は様々であり、展示法によって来園者が受ける印象や自然と注目してしまう点が変わったりするため興味深かった。すべての動物園がそういうわけではないが、やはり動物のエンリッチメントに配慮した展示方法という点では日本は欧米に後れを取っているような印象を受けた。これは動物園に従事する方々の意識の差というよりは、来園者側の動物園への期待する役割の違いによるものだと感じた。例えば広い敷地で行動展示を行っているような場所では動物が姿を現さないこともあるそうだが、講義中も話が出たように日本では苦情に繋がってしまう恐れがある。動物園のエンリッチメントや動物福祉といった言葉もまだあまりなじみがないように思われるため、今後、これらの考えが広がって、動物園への意識や印象が変化していくことを願っている。JMCで行われている校外学習はこのことにも有効であるように思われる。

今回実習では、キュレーターの普段表には出ない仕事を中心にレクチャーしていただいた。今まで動物園とは、動物を来園者に娯楽のために見せている場所という印象が強かったが、今回の実習を通して、博物館としての機能も有する JMC では、展示にメッセージ性を持たせたり、講習を頻繁に行っていたりと教育的側面を重要視していることが分かった。また新しい展示場はもちろん、古くからの狭い展示場でも限られたスペース・予算の中で飼育動物のエンリッチメントにも配慮するべく、飼育員の方の手作りの寝床や遊び道具が置かれており、飼育動物への愛情や理解の深さが伺えた。



左：骨格標本の仕分け



真ん中：ワオキツネザル



右：パタスモンキーの抜糸手術の様子

6. その他 (特記事項など)

本実習は、PWS より支援を受けて遂行できました。PWS プログラム及び、受け入れてくださった日本モンキーセンターの新宅様、赤見様、高野様、綿貫様、その他スタッフの皆様にご心より感謝申し上げます。